



会長からの
メッセージ

ボス・ジョーの引退



土木学会第98代会長

阪田 憲次



の世を去った。「立派なボスでした」と言う。

このドキュメンタリーを見て、チンパンジー村という小さな社会の中に、今の人間社会にはない秩序や礼儀作法があることに驚いた。

もう一つ、同じチンパンジー村でのエピソードを新聞で読んだ。チンパンジー村で生まれたオスのジンは、生母が育児放棄したため、やむなく飼育係に育てられた。しかし、人に育てられる期間が長くなると、群れに入ることができなくなる恐れがあるため、動物園ではそのことを考慮して、できるだけ人間との接触を少なくした。そして、サザエというメスを母親代わりとして同居させ、徐々に群れに入ることができるよう配慮した。チンパンジーは、礼儀作法を母親から学び、群れの中で社会性を身につけるといふ。ここにも、現在の人間社会では

希薄になってしまったが、親子の情愛、子どもに対するしつけが見られる。

チンパンジーは、サルではなく、類人猿である。つまり、われわれ人間の祖先である。われわれが、彼らと分かれてヒトとなり、さらに、長い人間としての歴史の中で、すでに忘れてしまった、あるいは失ってしまった良き性質が、彼らの中に見られるのである。人間が、本来有すべき徳性、品格を、ボスであるジョーの中に見ることができた。そして、それらが風格として、ジョーの姿を美しいものにしていった。組織の中で、尊敬され、信頼される、真のリーダーとはどういふものか、その引き際はどうかあるべきかを、「品格論」のような実体の伴わない言葉ではなく、ジョーはその姿によって見事に見せてくれた。

静かに迫る感動で胸が震えた。

多摩動物公園のチンパンジー村におけるボス交代のドキュメンタリーを、テレビで見た。長年ボスとして君臨してきたジョーが齢を取り、

交代の時期になった。ジョーは、優れたボスで、力もあり、度量が大きく、群れの構成員、とくにメスからの信頼が厚い、リーダーシップに富んだ名ボスであった。飼育員のだけれもがそのことを認めていた。ジョーの

後継者としてあらかじめ育てられたケンタは、ジョーに比べれば、ボスとして少し力量が劣るように思えた。

ボス交代のための争いは、きわめて激しいものであった。ケンタの執拗な攻撃に、ジョーも抵抗した。しかし、傷を負って、チンパンジー村の隅に追いやられることが多くなった。村の構成員たちも、ボス交代の

時期がきたことを理解しているのか、その争いを遠巻きに見ていた。長い抵抗の末、やがて、ジョーも自らの退任を受容し、新ボス・ケンタの

前に膝を折り、恭順の意を示し、静かにボスの座を下りた。その姿に、深い悲しみと孤独感が漂っていた。飼育員の話によれば、その後のジョーは、群れから少し離れたところで、静かに余生を送り、翌年、こ